

ジャンル別ベスト5。 自信をもってお薦めします

総合

A さて、「ダカーボ」編集部が選ぶ本ベスト5を紹介しましょう。
B 去年は首相の靖国参拝や歴史教科書問題、今年は北朝鮮の拉致問題。妙にナシヨナリズムがブームになっているように思えるんだけど、何だか不気味じゃない？

A 教育基本法に「郷土や国を愛する心」を育てることを盛り込む、なんて話もありますよね。「愛国心とは何か」という議論をいじ加減にしたまま、「気分」だけが先行している気がします。
B そこで、強烈にひかれたのが『民主』と『愛国』だった。敗戦直後の広島で、大群衆に向かって

総合 ベスト5



『(民主)と(愛国)』

小熊英二
新曜社
6300円

戦争の記憶とともに「戦後」の姿をダイナミックに、そして繊細に浮かび上がらせ、「戦後思想」の真実を鋭く問い直した挑発の書



『オリガ・モリソフナの反語法』

米原万里
集英社
1800円

1930年代、スターリンによる「粛清」に激震するロシア・東欧。時代の荒波に翻弄されながらも、懸命に生きた踊り子の衝動の過去をめぐる物語

『世界最高のクラシック』

許光俊
光文社新書
720円

「最高」の指揮者と「最高」の演奏とは何か。鋭いクラシック評論家が贈る、孤高のクラシック批評である。入門書としても最適の一冊

『球形時間』

多和田葉子
新潮社 1500円

ある放課後、時空をさまよう英国女性と出会う高校生サヤ。太陽を崇拜する青年にひかれるクラスメート・カツオ。2人の日常を描く奇妙な学園小説

『反=近代文学史』

中条省平
文芸春秋 2000円

明治以後の「反主流」小説家たちの作品に新たな意味を与え、近代文学の「自明性」を根底から覆した強烈かつ大胆な文芸批評。論旨も明快

もに名物老女教師であるオリガの足跡を追う。そして徐々に明らかになっていく謎……。一度読み始めたなら止まらなくなりました。
C 私は「世界最高のクラシック」が一番面白かったな。これまでよ

く知らなかったクラシック音楽に俄然興味が出てきたもの。
A 著者の許光俊自らが言うように、まさに「興味はあるけれど、あまり知識や経験を持っていない人、いきなり銀座の有名すし屋

手を振る昭和天皇の表紙がなんだか象徴的でさ。世相に「不気味さ」を感じる一人として思わずジャケ買い。
C 900円もあるこの本を？
B でもね、これが読んでみると期待以上の面白さ。丸山眞男や竹内好といった戦争体験を持つ戦後知識人たちが、「民主」や「愛国」という言葉にどんな思いを託していたのか。それは、時代を超えて多くのことを教えてくれる。

A 著者の小熊英二さんは戦後のナシヨナリズムや「公」をめぐる言論を一つ一つ検証していくんですよ。『民主』と『愛国』って矛盾する概念に思われがちですが、かつての戦後知識人にとって容易に両立するものだったとする著者の記述に、目を開かれる思いがしました。
C ふーん。でもそれって「戦後」の話でしょ。なんだか古臭いなあ。
B でも、君だって「戦後とは何か」と聞かれたらはずきりと答えられないでしょ？ なら、どうして「戦後」が古臭いと言えるのさ。

に連れて行く」ような本です。わけても分からずたらふく食っているうちに、クラシックのすごさが分かってくるんです。
古いものを現在の文脈で問いただす本
B それだけじゃない。この本もまた、クラシックを通して時代を語っているんだ。ハッピーエンドの多いクラシック音楽を、いま演奏し、聴く意味は何か？ を問いかけてくる。明日は今日よりきつといい、なんて言えなくなった時代に聴く意味を。
A あと面白かったものといえ

A それだけにこの言葉は複雑で重いんです。「民主」や「愛国」という言葉もまた然り。だからこそ、本書はその複雑さへ見事にメスを入れた名著だと言いたいですね。
「時代」に翻弄されるロシア、東欧の人々
A 第2位に挙げたのは「オリガ・モリソフナの反語法」。
C 著者の米原万里さんはロシア語の通訳者でもあるのよね。彼女の通訳をめぐるドタバタエッセーも私は大好き。いつも爆笑しちゃう。

B でも、この本のテーマは深刻だよ。スターリンによって「粛清」が行われたという激動の1930年代において、ロシア・東欧を生きた人々が「時代」という名の怪物に運命をもてあそばされる様子が痛々しいんだ。
A あと、この作品では物語をたないでいく著者の技が光っていましたね。少女時代をブラハで過ごした日本人・志摩が、かつて通っていたソビエト学校の同級生とと

な。学園小説なんですけど、これが奇妙奇天烈。まあ、この著者の他の作品にももっと変な世界観のモノがたくさんあるから、彼女にしてみればまともなんですけどね。
B オレは断然、中条省平の『反近代文学史』を薦めるね。泉鏡花、山田風太郎、筒井康隆……。明治から現代までの小説家のなかでも「反主流」の人たちを取り上げていのが特徴。これがまた素晴らしい。文芸作品を批評することを通して、「メインストリームから外れた芸術」とは何かをえぐり出している。しかも、流れはスツキリ。電車で読める文芸批評なんて、そう簡単には出会えないよ。